

哺 乳 類

1. 選定・評価方法の概要

検討対象範囲は、東京都島しょ部において、現在生息が確認されているか、明治時代頃まで生息の記録がある在来の哺乳類のうち、陸域を生活の場とするもの、及びアザラシ類など陸に上がる可能性があるものとし、海域だけにみられるイルカ・クジラ類は対象に含めなかった。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定量的要件を用い、CR(絶滅危惧IA類)とEN(絶滅危惧IB類)も区別した。

検討対象種として、伊豆諸島については、前回(1998年版)は含まれていなかったユビナガコウモリとニホンアシカの2種を加える一方、前回はアカネズミとは別の種とされていたミヤケアカネズミ(三宅島個体群)を、亜種オオシマアカネズミ(大島、新島個体群)とともに、アカネズミ1種にまとめ、合計7種とした。この取り扱いは、いずれの亜種に属するか不明な個体群(式根島、神津島)があることや、遺伝的・形態的に新島個体群が大島個体群より三宅島個体群に近いと考えられること(Kageyama et al., 2009)などから、既知の亜種を評価単位とするのは適切でないと考えたことによる。小笠原諸島については、前回のオガサワラオオコウモリにオガサワラアブラコウモリを加えた2種を検討対象とした。

2. 選定・評価結果の概要

＜伊豆諸島＞

評価の結果、ニホンアシカ1種をEX(絶滅)、ユビナガコウモリ1種をDD(情報不足)とした。ニホンアシカは、1908年(明治41年)まで神津島に生息していたという記録がある(環境庁, 1991)。ユビナガコウモリは、これまで伊豆諸島で記録がなかったが、2009年9月から11月に大島の行者海岸トンネル内で複数個体が確認されており(天野ら, 2011)、島外からたまたま飛来したとも考えられるが、少数が定着している可能性もあることからDDと評価した。以上の2種のほかに種全体としていずれかの絶滅危惧カテゴリーに該当する種はなかったが、アカネズミの三宅島個体群は、短期間の現地調査でも生息が確認できるなど、当面絶滅のおそれは高くはないと考えられるものの、外来のニホンイタチによる捕食と2000年の噴火の影響を大きく受けている可能性があるため、NT相当の地域個体群(LP)と評価した。キクガシラコウモリとコキクガシラコウモリの2種は、現地調査により利用洞穴で相当数が確認されるなど、伊豆諸島全体としては絶滅のおそれは低いと考えられる。しかし、伊豆大島と御蔵島においては、コキクガシラコウモリの利用が知られていた洞穴(防空壕)が改変を受けており、現地調査では生息が確認できなかった。洞穴性コウモリ類は、このように、採餌環境である森林が保全されていても、人為によって生息拠点が失われることの影響が大きく、保護上の配慮が必要と考えられることから、2種ともに留意種とした。ニホンジネズミとニホンイタチは、生息状況に懸念すべき点は知られておらず、いずれのカテゴリーにも該当しないと評価した。

今後の課題として、とくにコウモリ類による洞穴(人工・天然を問わず)の利用状況について調査を行い、重要な洞穴については周辺環境を含めて改変を受けないような配慮をすることが望ましい。

＜小笠原諸島＞

検討対象となった2種のうち、オガサワラオオコウモリはEN、オガサワラアブラコウモリはEXと評価した。ただし、オガサワラアブラコウモリは、19世紀末に母島で採集されたと言われ

る模式標本1個体が知られるのみで、本当にここで繁殖していたのか疑問視する意見がある(前田, 2001)。オガサワラオオコウモリは、個体数はきわめて少ない(諸島全域で合計200～300頭)ものの、近年は安定もしくは漸増傾向にある(鈴木・稲葉, 2010)ことからENと評価した。

小笠原諸島の固有種であるオガサワラオオコウモリは世界的にみても重要な保全対象である。現在、オガサワラオオコウモリの脅威となっている要因として、生息記録がある島のうち、南硫黄島以外の島(父島、母島、北硫黄島、硫黄島)において、外来種であるイエネコの捕食、ネズミ類による餌競合と植生への影響、さらに主要な生息地である父島では、ねぐら域の開発・攪乱、食害防止ネットへの絡まり事故などがあげられている(鈴木・稲葉, 2010)。これらの問題解決のため、早急かつ適切な対策が望まれる。また、復帰当時(1968年)、数百頭規模の生息が知られていた母島では、生息環境は維持されているにもかかわらず、1970年代後半以降、数頭程度の情報があるだけで現在まで回復が認められない。この原因を究明し、安定した個体群の確立を図ることも重要な課題である。

【引用文献】

- 天野典子・天野洋祐・成瀬裕昭, 2011. 伊豆大島におけるユビナガコウモリの初記録. コウモリ通信, 18(1): 7-9.
- Kageyama, M., M. Motokawa & T. Hikida, 2009. Geographic variation in morphological traits of the large Japanese field mouse, *Apodemus speciosus* (Rodentia, Muridae), from the Izu Island Group, Japan. *Zoological Science*, 26: 266-276.
- 環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 日本野生生物研究センター.
- 前田喜四雄, 2001. 日本コウモリ研究誌. 東京大学出版会.
- 鈴木創・稲葉慎, 2010. 空飛ぶ森の守り神と島々の未来—オガサワラオオコウモリの生態と保全策—. 遺伝, 64(4): 61-67.

(石井 信夫)

キクガシラコウモリ

*Rhinolophus ferrumequinum*コウモリ目(翼手目)
キクガシラコウモリ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

前腕長 52～65mm、頭胴長 55～82mm、尾長 28～45mm、体重 16～35g。比較的大きいコウモリで、体毛は淡褐色。吻には鼻葉がある。昼間は洞窟などに集団で休息する。翼で身体を包むようにして休む。主に樹林内や林縁で採餌し、ガ類や甲虫類など大型の昆虫類を食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

洞穴や防空壕跡をねぐらとして利用し、樹林などで採餌する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

防空壕跡には、危険防止のため入口をふさがれたり、埋められたりして、コウモリが利用できなくなっている箇所がある。多数個体が利用する重要なねぐら場所や繁殖場所が改変されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性がある。

【関連文献】

佐野明・福井大(監修), 2011.

(執筆: 石井信夫・土屋公幸)



コキクガシラコウモリ

*Rhinolophus cornutus*コウモリ目(翼手目)
キクガシラコウモリ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

前腕長 36～44mm、頭胴長 35～56mm、尾長 16～30mm、体重 4～9g。小型のコウモリで、体毛は淡褐色。吻には鼻葉がある。昼間は洞窟などに集団で休息する。翼で身体を包むようにして休む。主に樹林内で採餌し、ガ類やハエ類、カ類など小型の昆虫類を食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

洞穴や防空壕跡をねぐらとして利用し、樹林などで採餌する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

防空壕跡には、危険防止のため入口をふさがれたり、埋められたりして、コウモリが利用できなくなっている箇所がある。重要なねぐら場所や繁殖場所が改変されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性がある。

【関連文献】

佐野明・福井大(監修), 2011.

(執筆: 石井信夫・土屋公幸)



ユビナガコウモリ

*Miniopterus fuliginosus*コウモリ目(翼手目)
ヒナコウモリ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

前腕長 45～51mm、頭胴長 59～69mm、尾長 51～57mm、体重 10～17g。昼間は洞窟や防空壕に群れで休息する。集団の大きさは数百から数千にもなる。休息時には翼を前側に折りたたむ。樹冠上や草原など開けた空間で採餌し、ガ類やハエ類などの昆虫類を食べる。行動域が広く、季節的な長距離移動をすることが知られている。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島では 2009 年に大島東岸の行者海岸トンネル内で観察されたのが本種の初記録であるが、定着しているかどうかは不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息状況は不明であるため、調査を行うことが望まれる。

【関連文献】

天野典子ら, 2011; 佐野明・福井大(監修), 2011.

(執筆: 石井信夫)



○ 成瀬裕昭

ニホンアシカ

Zalophus japonicus

ネコ目（食肉目）
アシカ科

伊豆諸島

EX

環境省

CR

【形態・生態】

雄成体は全身暗褐色、若い雌成体は灰褐色。雄成体の平均体長は 240cm、平均体重は 490kg。雌成体の体長は 180cm、体重は 120kg と推定されている。食性など生態の多くは不明である。

【分布の概要】

日本周辺海域に分布していた。

【伊豆諸島における生息環境】

式根島、恩馳島に繁殖場があったが、現在は見られない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は絶滅している。明治期以降の過度の捕獲が原因と考えられている。

【関連文献】

和田一夫・伊藤徹魯, 1999; Isono, T. & T. Inoue, 2009.



© 天王寺動物園

（執筆者：石井信夫）

哺乳類

伊豆諸島

アカネズミ（三宅島個体群）※備考 (p. 308)

Apodemus speciosus

ネズミ目（齧歯目）
ネズミ科

伊豆諸島

LP

環境省

【形態・生態】

頭胴長 80 ～ 134mm、尾長 70 ～ 114mm、体重 20 ～ 60g。尾が長く、背面はレンガ色、腹面は白色。ただし三宅島産の個体は色が濃く、腹面も褐色を帯びる。主に植物の種子や根茎などを食べるが、昆虫類も食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州

【伊豆諸島における生息環境】

樹林に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島では、2000 年の噴火による植生の衰退と、1982 年ごろに導入され定着したニホンイタチによる捕食の影響が懸念されている。短期の調査により本種の生息が確認できるので激減はしていないと思われるが、生息状況には不明点が多く、調査を行うことが望まれる。

【関連文献】

高田靖司ら, 1999; 阿部永 (監修), 2008.



（執筆者：石井信夫・土屋公幸）

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、次の文献に準拠した。

阿部永 (監修), 2008. 日本の哺乳類 改訂 2 版 . 東海大学出版会 . 206 pp.

【備 考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
アカネズミ (三宅島個体群)	三宅島では放獣されたニホンイタチによる捕食の影響、および噴火による森林植生の衰退の影響を受けている可能性があり、NT に相当すると評価した。

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
キクガシラコウモリ	個体数、生息条件について現状で大きな問題は知られていないが、ねぐらとなっている洞穴がふさがれたり破壊されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性があるため、留意が必要である。
コキクガシラコウモリ	伊豆諸島全体でみると絶滅のおそれは低い、大島と御蔵島において、利用が知られていた防空壕が改変され、その場所での生息が確認されなくなった事例がある。このように、多くの個体が集中する洞穴がふさがれたり破壊されれば地域個体群に大きな影響が及ぶ可能性があるため、留意種とした。

【関連文献】

阿部永 (監修), 2008. 日本の哺乳類 改訂 2 版 . 東海大学出版会 . 206 pp.

天野典子・天野洋祐・成瀬裕昭, 2011. 伊豆大島におけるユビナガコウモリの初記録 . コウモリ通信, 18(1): 7-9.

Isono, T. & T. Inoue, 2009. *Zalophus japonicus* (Peter, 1866). In: Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa & T. Saitoh (eds.) The Wild Mammals of Japan, pp. 288-289. Shoukadoh.

佐野明・福井大 (監修), 2011. コウモリ識別ハンドブック改訂版 . 文一総合出版 . 88 pp.

高田靖司・酒井英一・植松康・立石隆, 1999. 伊豆諸島における小哺乳類の分布 . 日本生物地理学会会報, 54: 9-19.

和田一夫・伊藤徹魯, 1999. 鰐脚類－アシカ・アザラシの自然史 . 東京大学出版会 . 284 pp.

オガサワラオオコウモリ

Pteropus pselaphon

コウモリ目(翼手目)
オオコウモリ科

小笠原諸島 EN

環境省 EN

【形態・生態】

中型のオオコウモリで、前腕長 130 ～ 150mm、頭胴長 200 ～ 240mm、尾はない。体重 380 ～ 440g。全身黒褐色で、銀白の毛が混じる。一般に夜行性で、昼は樹林内のねぐらで休息している。主に果実、花蜜、木の葉を採食する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

樹林に昼間のねぐらがある。個体数は非常に少なく、主要な個体群は父島の約 150 頭、南硫黄島の数百頭である。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島では 1968 年の日本復帰時に数百頭が確認されているが、1970 年代後半以降、数頭程度の目撃となり、現在も個体数の回復がみられない。減少の原因は不明である。父島では、ねぐらのある樹林の開発、観察ツアーによるねぐらのかく乱、果樹食害防止ネットへの絡まり事故が脅威となっている。このほか父島に限らずネコによる捕食、クマネズミなどの餌資源の競合も脅威である。

【関連文献】

阿部学, 2002; 鈴木創・稲葉慎, 2010.

(執筆者: 石井信夫)



哺乳類

小笠原諸島

オガサワラアブラコウモリ

Pipistrellus sturdeeii

コウモリ目(翼手目)
ヒナコウモリ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

アブラコウモリより小型で、前腕長 30mm、頭胴長 37mm、尾長 31mm。生態についての情報はない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

どのような環境に生息していたか不明である。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島で 1915 年に採集されたというタイプ標本 1 点(大英自然史博物館所蔵)が存在するのみで、その後、採集記録がない。絶滅したとされているが、個体群として定着していたかどうか、絶滅の原因も不明である。

【関連文献】

前田喜四雄, 2002; Kawai, K., 2009.



©Natural History Museum, London

(執筆者: 石井信夫)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、次の文献に準拠した。

阿部永(監修), 2008. 日本の哺乳類 改訂 2 版. 東海大学出版会. 206 pp.

【関連文献】

阿部学, 2002. オガサワラオオコウモリ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—1 哺乳類, pp. 34-35. 自然環境研究センター.

Kawai, K., 2009. *Pipistrellus sturdeeii*. In: Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa & T. Saitoh (eds.) The Wild Mammals of Japan, p. 83. Shoukadoh.

前田喜四雄, 2002. オガサワラアブラコウモリ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—1 哺乳類, p. 23. 自然環境研究センター.

鈴木創・稲葉慎, 2010. 空飛ぶ森の守り神と島々の未来—オガサワラオオコウモリの生態と保全策—. 遺伝, 64(4): 61-67.

鳥類

1. 選定・評価方法の概要

移動能力が大きい鳥類は、東京都の島しょ部においても渡り鳥であるシギ・チドリ類やカモ類などは本土と共通種が多いが、繁殖する鳥類においては特有の鳥類相をもつ。陸鳥類では、固有種や固有亜種が多く、種や亜種の進化の実例を見ることができる。また、海洋性の鳥類の営巣地として機能している場所も多く、日本近海だけでなく太平洋の生物多様性保全上大きな役割も持つといえる。

検討対象種は、陸上に加えて島しょ近海を重要な生息環境としていると考えられる種については含めることとした。

伊豆諸島では、32 科 85 種・亜種を検討対象種とした。本土に近い伊豆諸島は、本土と共通種が多いが、アカコッコやイイジママシクイなど固有種に加えて、タネコマドリやモスケミソサザイなど固有亜種が存在する。ヤマガラは、島ごとに亜種が分かれており、進化の実例を示すものとなっている。

小笠原諸島では、23 科 39 種・亜種を検討対象種とした。小笠原諸島は、本土からの距離が大きいためメグロ、アカガシラカラスバトなど固有種・固有亜種が多いが、オガサワラマシコやオガサワラカラスバト、オガサワラガビチョウなど、日本で絶滅した鳥類の多くが小笠原諸島に集中する。

検討にあたっては、定量的に判定することを原則とした。ランクの判定では、広域的な分布や生息状況を考慮に入れた。

2. 選定・評価結果の概要

<伊豆諸島>

検討の結果、CR(絶滅危惧ⅠA類)5種、EN(絶滅危惧ⅠB類)10種、VU(絶滅危惧Ⅱ類)10種、NT(準絶滅危惧)12種、DD(情報不足)3種となった。

鳥類に与える脅威としては、北部の神津島や新島では森林面積が少なくなっているため、森林の伐採があるとヤマガラ類など森林性の鳥類への影響が大きいと考えられる。三宅島は、雄山の噴火によりウチヤマセンニュウの国内最大の生息地であった火口原が消失したほか、続く火山ガスにより植生回復が遅れており、陸生鳥類に大きな影響を与えている。また、人為的に導入されたニホンイタチが増加し、アカコッコの生息数の減少が著しい。御蔵島では、近年野外でのネコの目撃が増えており、今後、オオミズナギドリへの影響に留意が必要である。海鳥であるカンムリウミスズメの営巣地は三宅島近傍の大野原島や神津島近傍の祇苗島などの小島に存在する。営巣地へのネズミの侵入は卵やヒナの捕食を生じ、釣り人の上陸は繁殖活動を攪乱すると考えられる。

<小笠原諸島>

検討の結果、EX(絶滅)11種、CR(絶滅危惧ⅠA類)4種、EN(絶滅危惧ⅠB類)5種、VU(絶滅危惧Ⅱ類)5種、NT(準絶滅危惧)3種、LP(絶滅のおそれのある地域個体群)1種となった。

鳥類に与える脅威としては、森林の伐採や外来植物や外来草食動物による植生環境の変化の影響が大きい。また、海洋性鳥類のコロニーへのネズミ等の侵入リスクは常に存在し、一度侵入を許せば個体群に壊滅的な打撃を与えるおそれがあるので、ネズミ等が侵入しないような取組が必要である。アカガシラカラスバトやアホウドリ類については保護増殖事業が進められていること、外来生物対策も実施されていることから生息状況や生息環境条件の回復も期待される。

(金井 裕)

オシドリ

Aix galericulata

カモ目
カモ科

伊豆諸島

CR

環境省

DD

【形態・生態】

全長 45cm。雄の繁殖羽は派手な羽色で、冠羽と銀杏羽が特徴。雌は全体的に灰色。主に植物質食で、スダジイなどの堅果を好むほか、植物の種子、水生植物の茎などを採食する。水生昆虫や軟体動物も採食する。繁殖期は4～7月で、樹洞などに卵を産む。一腹卵数は7～12個。雌のみで抱卵し、育雛を行う。

【分布の概要】

主に本州(中部以北)で繁殖する。日本海側を除くほぼ全国で越冬する。伊豆諸島には少数が越冬のために訪れる。

【伊豆諸島における生息環境】

スダジイやタブノキなどの照葉樹林に囲まれた三宅島の池では、少数が越冬する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水辺に照葉樹が覆いかぶさるように茂った薄暗い環境を保全することが望ましい。また、ねぐらや休息場所を確保し、人の立入りに留意することが望ましい。

【関連文献】

藤巻裕蔵(編著), 2006.

(執筆: 山本裕)



鳥類

伊豆諸島

カラスバト

Columba janthina janthina

ハト目
ハト科

伊豆諸島

EN

環境省

NT

【形態・生態】

全長 40cm。体色は黒色で紅紫色や緑色の金属光沢がある。ウウー、ウウーと太い声で鳴く。暖かい地方の海岸や島で留鳥として生息するが、生息数は多くない。照葉樹林などの密生した樹林を好む。直立した姿勢で枝にとまり木の実や花芽などを採食するが、地上に落ちた木の実を採食することもある。比較的ゆっくり羽ばたいて飛ぶ。

【分布の概要】

日本と朝鮮半島南部の海岸や島しょのみに分布し、留鳥として本州中部以南の島しょに生息する。春と秋の渡りの時期には日本海側の島しょで観察されることが多い。

【伊豆諸島における生息環境】

スダジイやタブノキのよく発達した照葉樹林に留鳥として生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

地上で採食する場合も多いので、ニホンイタチやネコなどによる捕食が直接的な脅威となる。また、生息環境となる積の大きい照葉樹林の改変を避け、現状を保全することが望ましい。

【関連文献】

岩崎由美・市石博, 1998; 中野晃生, 2006.

(執筆: 川内博)



コアホウドリ

Phoebastria immutabilis

ミズナギドリ目
アホウドリ科

伊豆諸島

CR

環境省

EN

【形態・生態】

全長 80cm。体は白色で、翼の上面と尾羽は濃灰色。一夫一妻で繁殖し、一腹卵数は1個。繁殖開始は8～9歳。繁殖期以外は海上で暮らす。主に表層で、イカ類、魚類、甲殻類などを採食する。イカ類への依存度が高い。

【分布の概要】

北太平洋北部に広く分布する。小笠原諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

現在は繁殖していない。伊豆諸島近海、特に南部の海域では冬によく観察される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

プラスチック類やゴミの誤飲、有害物質や油流出事故による海洋汚染が生存に対する脅威であり、汚染防止を進めていくことが望ましい。漁業による混獲のおそれもある。

【関連文献】

中村登流・中村雅彦, 1995; 長谷川博, 2003.

(執筆: 山本裕)



クロアジアホウドリ

*Phoebastria nigripes*ミズナギドリ目
アホウドリ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 70cm。全身がすすけた黒褐色で、嘴のつけ根と目の下は白い。嘴と足は黒い。10～5月にかけて、一夫一妻で繁殖する。繁殖開始は7～8歳。一腹卵数は1個。イカ類、魚類、甲殻類などを採食し、特にトビウオ類を好む。

【分布の概要】

太平洋北部に広く分布する。伊豆諸島、小笠原諸島、尖閣諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

鳥島のまばらに草本類が生える斜面、あるいは裸地で繁殖する。伊豆諸島近海では、冬から春にかけて海上で観察される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣地の植生の貧弱化、クマネズミによる雛や卵の捕食、プラスチック類やゴミの誤飲、有害物質や油流出事故による海洋汚染が生存に対する脅威であり、汚染防止を進めていくことが望ましい。漁業による混獲の恐れもある。

【関連文献】

中村登流・中村雅彦, 1995; 長谷川博, 2003.

(執筆: 山本裕)



アホウドリ

*Phoebastria albatrus*ミズナギドリ目
アホウドリ科

伊豆諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

全長 90cm。成鳥は胸が白く頭部は黄色。翼の先端と後縁、尾の先端は黒褐色。嘴は淡い紅色。一夫一妻で一腹卵数は1個。親鳥は10月ごろに繁殖地に渡来し、雛は5月ごろに巣立つ。巣立ち後3～4年で帰島し、繁殖開始は平均7歳。海の表層でイカ類や甲殻類、魚類を採食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、尖閣諸島で繁殖する。最近、ハワイ諸島のミッドウェー環礁でも繁殖が確認された。非繁殖期には主に北太平洋北部で過ごす。

【伊豆諸島における生息環境】

鳥島のまばらに草本類が生える斜面や裸地に営巣する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣地の植生の貧弱化、クマネズミによる雛や卵の捕食、プラスチック類やゴミの誤飲、有害物質や油流出事故による海洋汚染が生存に対する脅威である。鳥島の噴火の影響を軽減するために、小笠原諸島の鴎島への再導入が進められている。

【関連文献】

長谷川博, 2003; 江田真毅・樋口広芳, 2012.

(執筆: 山本裕)



オオミズナギドリ

*Calonectris leucomelas*ミズナギドリ目
ミズナギドリ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 48cm。背中は灰褐色で下面は白色。頭部には褐色の斑点があり、嘴や足は淡紅色。伊豆諸島には夏鳥として3月ごろに戻ってくる。一夫一妻で繁殖し、一腹卵数は1個。産卵期は6～7月。抱卵は約55日。日中は海上で採餌、夜は巣に戻り、雛に給餌する。海の表層あるいは浅く潜り、甲殻類、イカ類、小魚などを採食する。親鳥は巣穴に雛を残したまま南下し、雛は自力で巣立ち、南へ向かう。

【分布の概要】

主に日本近海で繁殖し、国外では朝鮮半島、中国、ロシア東南部の島しょで繁殖する。非繁殖期には東南アジアからオーストラリア付近にまで南下する。

【伊豆諸島における生息環境】

照葉樹林の斜面や大木の根元などに穴を掘り、集団で繁殖する。

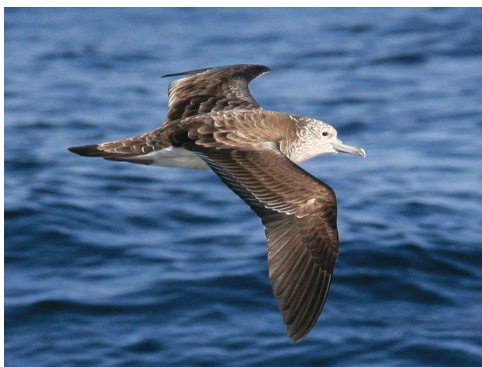
【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

繁殖地でノネコ、ネズミ類による捕食の影響があるため、対策が必要である。有害物質や油流出事故による海洋汚染もあり、汚染防止を進めていくことが望ましい。

【関連文献】

中村登流・中村雅彦, 1995.

(執筆: 山本裕)



ヒメクロウミツバメ

Oceanodroma monorhis

ミズナギドリ目
ウミツバメ科

伊豆諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

全長 19cm。全身くすんだ黒褐色で、翼の上面には淡色帯がある。繁殖期は5～10月。一夫一妻で繁殖し、一腹卵数は1個。繁殖期、日中は、繁殖地から離れた海域で過ごし、暗くなってから繁殖地に帰還する。表層の小魚、プランクトン、イカ類、甲殻類などを嘴でくわえて、採食する。

【分布の概要】

朝鮮半島や中国沿岸部などの島しょで繁殖する。国内では、本州（青森、岩手、石川、福岡）の一部の島しょ、伊豆諸島の一部の岩礁でのみ繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

スゲ類の根元の岩の窪みや、岩の隙間、土中などに営巣する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

繁殖地でのカラス類、ネズミ類による捕食、繁殖地への釣り人の立入りによるかく乱に留意することが望ましい。

【関連文献】

北九州野鳥の会研究部, 1967; 長谷川博, 1987.

(執筆: 山本裕)



鳥類

伊豆諸島

コシジロウミツバメ

Oceanodroma leucorhoa leucorhoa

ミズナギドリ目
ウミツバメ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

全長 20cm。体色は黒褐色で、上尾筒と下尾筒側部は白い。上尾筒の白色部中央に黒線がある個体もあり、変異が多い。翼上面には淡い帯が出る。繁殖期は5～10月で、一夫一妻で繁殖し、一腹卵数は1個。繁殖地の斜面に深さ20～60cmほどの穴を掘り、営巣する。雌雄交代で抱卵する。海の表層でオキアミやヨコエビ、小魚、イカの幼体などを夜間に採食する。

【分布の概要】

北太平洋および北大西洋の寒帯・亜寒帯の島しょで繁殖する。国内での繁殖地は北海道の大黒島、ハボマイモシリ島。非繁殖期は、寒帯から熱帯までの海域に分散する。

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島近海では、冬に稀に観察される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

有害物質や油流出事故による海洋汚染が懸念されるため、汚染防止を進めていくことが望ましい。

【関連文献】

Harrison, P., 1983; 綿貫豊, 1985.

(執筆: 山本裕)



オーストンウミツバメ

Oceanodroma tristrami

ミズナギドリ目
ウミツバメ科

伊豆諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

全長 25cm。全身黒褐色。翼上面に淡い褐色の帯がある。尾羽は燕尾型。繁殖期は冬で、繁殖地には11月ごろに戻る。日中は、繁殖地から離れた海域で過ごし、夜、20時ごろに帰還し、3時ごろには繁殖地を離れる。一腹卵数は1個。1月中旬ごろに産卵し、3月下旬に孵化、5月ごろに巣立つ。海の表層にいる小魚やイカ類、甲殻類などを採食する。標識調査より15年経過した個体も確認されている。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、ハワイ諸島で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

ヒゲスゲが優占し、ハチジョウススキなどが混生する土の斜面に穴を掘り、営巣する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

繁殖地でのカラス類、ネズミ類による捕食が懸念される。鳥島ではクマネズミの侵入により、コロニーが消滅し、回復していない。移入種の侵入防止や釣り人へのマナー啓発を行うことが望ましい。

【関連文献】

長谷川博, 1987; 原徹, 2000.

(執筆: 山本裕)



カツオドリ

*Sula leucogaster plotus*カツオドリ目
カツオドリ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 73cm。頭部、胸、上面は黒褐色で、腹は白。顔には皮膚の裸出部があり、雄は青色で雌は黄白色。伊豆諸島では、一部の岩礁で繁殖するほか、春と秋に定期航路や海岸などから観察できる。魚を採食するために海中に真っ逆さまに飛び込む。枯枝や枯草、海草などを集めた皿型の巣をつくり、一腹卵数は 2 個。このうち 1 卵のみが育つ。

【分布の概要】

熱帯から亜熱帯の海域に広く分布する。国内では、伊豆諸島の一部、小笠原諸島、草垣諸島、トカラ列島、尖閣諸島、八重山諸島で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

島しょの急峻な崖の上部や岩棚などを利用し、営巣する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

御蔵島と八丈島の間にある蘭難波島は、繁殖地の北限に当たる。釣り人が立ち入ることがあり、繁殖地のかく乱やネズミ類の侵入を防止することが望ましい。

【関連文献】

望月英夫, 1973.

(執筆: 山本裕)



ヒメウ

*Phalacrocorax pelagicus pelagicus*カツオドリ目
ウ科

伊豆諸島

VU

環境省

EN

【形態・生態】

全長 73cm。全身黒色で、青色や紫色の光沢がある。ウミウより小型で細い。繁殖期は 5 月中旬～7 月中旬。一夫一妻で繁殖すると考えられ、岩棚や岩の窪みに皿形の巣をつくる。一腹卵数は 2～6 個で、通常 3 個。砂地の転石があるような場所で、主に底棲性の魚類を採食する。

【分布の概要】

太平洋北部およびベーリング海に分布し、カムチャッカ半島やアラスカ沿岸、千島列島、アリューシャン列島などで繁殖する。国内では北海道の島しょおよび本州(岩手)の一部で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島には 10 月中旬ごろから越冬に訪れ、3 月下旬ごろまでを過ごす。人が近づけない、風のあたらない急峻な崖を、ねぐらや休息場として利用する。

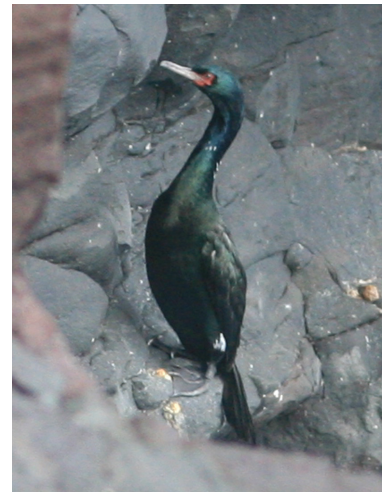
【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

有害物質や油流出事故による海洋汚染が生存に対する脅威であるため、汚染防止を進めていくことが望ましい。漁業による混獲の恐れもある。

【関連文献】

柴田敏隆, 1980.

(執筆: 山本裕)



ミゾゴイ

*Gorsachius goisagi*ペリカン目
サギ科

伊豆諸島

CR

環境省

VU

【形態・生態】

全長 49cm。全身茶褐色で、頭頂は濃色。体の下面は淡く、喉に黒い縦線がある。樹林内で暮らし、他のサギ類のように集団繁殖はしない。繁殖期は 4～7 月。繁殖期前半の日没直後および日の出前の数時間によく鳴く。暗い樹林内を好み、谷筋や水辺の近くで、サワガニ、ミミズなどを採食する。

【分布の概要】

本州、四国、九州の低山帯の樹林地で繁殖する。最近、朝鮮半島南部でも繁殖が確認された。南西諸島、台湾、中国南部、フィリピン、モルッカ諸島などで越冬する。

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島では、以前は繁殖していたが、最近繁殖確認はなく、渡りの時期に観察されるのみである。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

主要な生息地となっている樹林や採餌場となる谷筋の環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

樋口広芳, 1973; 川上和人, 2010.

(執筆: 山本裕)



ササゴイ

Butorides striata amurensis

ペリカン目
サギ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

全長 52cm。ゴイサギより小さい。頭部は黒く、後頭には黒い冠羽がある。背中濃く、腹側は淡く。目先と足は黄色。水辺で待ち伏せたり、あるいはゆっくりと歩きながら、魚、カエル、甲殻類などを捕食する。九州の一部の地域では、疑似餌として、水面に葉やパンくずなどを投げ、近づく魚を採食することが知られている。繁殖期は4～7月で、一腹卵数は3～4個。

【分布の概要】

熱帯から温帯に広く分布する。夏鳥として、本州、四国、九州で繁殖し、南西諸島で越冬する。

【伊豆諸島における生息環境】

水辺に近い樹林地や海岸を利用する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渡りの際に利用する樹林や自然海岸を保全することが望ましい。

【関連文献】

Higuchi, H., 1986; 中村登流・中村雅彦, 1995.



(執筆: 山本裕)

アマサギ

Bubulcus ibis coromandus

ペリカン目
サギ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 51cm。夏羽の頭部から胸部にかけては亜麻色。それ以外は白色。嘴は黄色。非繁殖期は全身白色で、頭部にわずかに黄色が残る。伊豆諸島では、主に春の渡りの時期に、数羽から20羽前後の群れが通過していく。草地や畑などで昆虫やミミズなどを採食し、数日間島に滞在し、また移動する。年によっては若い個体が夏ごろまで残ることもある。

【分布の概要】

東アジア、東南アジア、インド、オーストラリア、ヨーロッパ南部、アフリカ、北アメリカ中部から南アメリカにかけての熱帯から温帯に広く分布する。国内では本州、四国、九州で夏鳥として繁殖する。南西諸島では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

自然海岸の草地や開けた農耕地を採餌場や休息場として利用する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渡りの際に利用する草地や自然海岸を保全することが望ましい。

【関連文献】

中村登流・中村雅彦, 1995.



(執筆: 山本裕)

チュウサギ

Egretta intermedia intermedia

ペリカン目
サギ科

伊豆諸島

VU

環境省

NT

【形態・生態】

全長 69cm。夏鳥。他のシラサギ類より嘴や首は短め。夏羽の嘴は黒く、目先は黄色。胸と背に飾り羽が生える。繁殖期は4～8月。雑木林や竹林などで、他のシラサギ類、ゴイサギとともに集団繁殖する。一腹卵数は3～5個で、4個が多い。浅い水辺や水田、湿地、草地で、魚類やカエル、昆虫類、甲殻類などを採食する。

【分布の概要】

中国南部、インド、ニューギニア、オーストラリア、アフリカ北部に分布。国内では、本州(東北以南)から九州で繁殖する。本州中部以南で越冬する個体もいる。南西諸島では冬鳥。伊豆諸島では渡り時期に少数が通過する。

【伊豆諸島における生息環境】

休息や採餌場として、海岸などの草地や水辺を利用する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渡りの際に採食、休息に利用する草地を保全することが望ましい。

【関連文献】

中村登流・中村雅彦, 1995.



(執筆: 山本裕)

コサギ

*Egretta garzetta garzetta*ペリカン目
サギ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 61cm。全身白色で、嘴、足は黒く、足の指は黄色。シラサギ類のなかでは最も小さい。夏羽には2本の長い冠羽、背と胸に飾り羽が生える。繁殖期は4～9月で、他のサギ類とともに集団繁殖する。一腹卵数は3～7個。水田、湿地、川、湖沼、干潟などで、魚類や甲殻類、カエルなどを採食する。多様な採餌方法を持ち、浅瀬を歩きまわり魚を採食するほか、待ち伏せや、浅瀬で片足を動かし、魚を追い出して採食することも知られる。

【分布の概要】

ユーラシア、オーストラリア、アフリカの温帯から熱帯にかけて広く分布する。国内では本州、四国、九州で繁殖する。伊豆諸島、小笠原諸島、南西諸島では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

水辺や海岸で採食する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

採餌場として利用する自然海岸を保全することが望ましい。

【関連文献】

中村登流・中村雅彦, 1995.

(執筆: 山本裕)



クロサギ

*Egretta sacra sacra*ペリカン目
サギ科

伊豆諸島

CR

環境省

【形態・生態】

全長 63cm。黒色型と白色型があり、南方にいくほど白色型の割合が増える。伊豆諸島では全て黒色型。主に海岸の岩場で、カニなどの甲殻類や魚類、貝類などを採食する。繁殖期は4～7月。海岸の岩棚や岩場に生えた樹木の上に皿型の巣をつくる。一腹卵数は2～3個。つがいごと、あるいは小集団で繁殖する。

【分布の概要】

中国南部、インドシナ半島、オーストラリア、ニュージーランドなどに分布し、国内では本州以南で留鳥。北海道では稀である。

【伊豆諸島における生息環境】

海岸部、特に自然海岸でよく見られる。生息地は局地的で、個体数は少ない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

主な生息地である自然海岸の減少を防ぐこと、また、繁殖期に、本種の営巣環境である海岸の岩棚や営巣木周辺への釣り人の不用意な立入りを防ぐためのマナー啓発を行うことが望ましい。

【関連文献】

樋口広芳, 1973; 中村登流・中村雅彦, 1995.

(執筆: 山本裕)



アマツバメ

*Apus pacificus kurodae*アマツバメ目
アマツバメ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

体長 20cm。成鳥は体の大部分が黒色で、腰が白い。翼は細長く鎌形。海岸から高山帯まで生息し、飛翔性昆虫類を採食する。山地の断崖や海岸の崖壁の亀裂などに営巣する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島(北部)で夏鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

夏鳥として、島内のいたるところの上空を群れで飛び回っている。島の海岸近くの崖や無人島の岩の隙間などに営巣していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種の営巣するような岩場を保全することが望ましい。また、営巣している無人島などへの釣り人の立入りが影響する可能性もあり配慮することが望ましい。

【関連文献】

小倉暁雄, 2000.

(執筆: 川内博・金井裕)



ヤマシギ

Scolopax rusticola

チドリ目
シギ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 34cm。頭部が大きく、体はずんぐりとしている。嘴が長く、足や尾羽は短い。背面は黒褐色で、体は赤褐色、灰褐色の細かく複雑な模様である。夜行性で、夕方になると、林縁や開けた草地に現れ、ミミズや昆虫、ムカデ類などを採食する。

【分布の概要】

ヨーロッパ東部からシベリア南部、サハリンまでの広い範囲で繁殖し、中国南部、東南アジア、インド、地中海沿岸やアフリカ北部で越冬する。国内では、伊豆諸島、北海道、本州中部以北で繁殖し、本州中部以南、四国、九州、南西諸島などで越冬する。伊豆諸島では、繁殖期よりも越冬期の方が見かけることが多い。

【伊豆諸島における生息環境】

照葉樹林から夏緑樹林までの樹林で見られる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地となっている樹林や採食する開けた草地、農耕地を保全することが望ましい。

【関連文献】

樋口広芳, 1973.

(執筆: 山本裕)



鳥類

伊豆諸島

アカエリヒレアシシギ

Phalaropus lobatus

チドリ目
シギ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

全長 19cm。雌の夏羽は、顔から頭頂、後頭は黒色。のどは赤褐色。嘴は黒く細い。翼の上面は黒褐色で、白い帯がはいる。雄の羽色は雌より淡い。北極海沿岸の湿地で繁殖する。一腹卵数は4個。抱卵、育雛は主に雄が行う。繁殖期以外は海上で暮らし、表層で甲殻類などを採食する。潮目、流れ藻のまわりなどでよく見かける。

【分布の概要】

北極海の沿岸で繁殖する。冬には太平洋西部、南アメリカの太平洋岸、大西洋にまで渡る。

【伊豆諸島における生息環境】

主に4～5月の春の渡りの時期に海上で観察される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

有害物質・油流出事故による海洋汚染が懸念されるため、汚染防止を進めていくことが望ましい。

【関連文献】

Harrison, P., 1983; 蓮尾純子, 1996.

(執筆: 山本裕)



ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus

チドリ目
ウミスズメ科

伊豆諸島

DD

環境省

CR

【形態・生態】

全長 26cm。伊豆諸島で繁殖するカムムリウミスズメとは冠羽がないことや嘴が黄白色であることから区別する。潜水し、甲殻類や小魚、貝類などを採食する。繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖し、一腹卵数は2個。離島や岩礁の樹林や草地の土壌に掘った穴、または岩の隙間などに営巣する。

【分布の概要】

太平洋北部の日本海沿岸、千島列島、カムチャッカ半島南部、アリューシャン列島、カナダ沿岸にかけて分布し、繁殖する。国内では北海道の島しょで局地的に繁殖する。冬には全国の海上で観察される。

【伊豆諸島における生息環境】

少数が越冬する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

有害物質・油流出事故による海洋汚染が懸念されるため、汚染防止を進めていくことが望ましい。漁業による混獲の恐れもある。

【関連文献】

Harrison, P., 1983.

(執筆: 山本裕)



カンムリウミスズメ

*Synthliboramphus wumizusume*チドリ目
ウミスズメ科

伊豆諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

全長 24cm。額、頬、冠羽は黒色で、後頭部、腹部は白色。背面は暗灰色。嘴は青灰色。繁殖期は 2～5 月。一腹卵数は 1～2 個。岩の隙間などに卵を産み、雌雄交代で約 30 日間抱卵する。孵化後、雛はすぐに海上に出て親鳥から給餌を受ける。採餌は、主に潮目などで、頭部を水面につっこみ、小魚、甲殻類などを採食する。

【分布の概要】

日本近海と朝鮮半島南部、日本海北西部に分布し、本州中部以南および朝鮮半島南部の島しょや岩礁で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

岩の隙間や切り立った崖の割れ目、スゲ類など草本類の根元などに営巣する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

繁殖地でのカラス類、ネズミ類などによる捕食がある。繁殖地への釣り人の立入りは抱卵放棄やネズミ類の進入を増やすことにつながる。混獲、油汚染も懸念される。

【関連文献】

Carter, H. R. et al., 2002; 小野宏治, 2010.

(執筆: 山本裕)



ミサゴ

*Pandion haliaetus haliaetus*タカ目
ミサゴ科

伊豆諸島

EN

環境省

NT

【形態・生態】

全長雄 54cm、雌 64cm。頭頂は白く、後頭に短い冠羽があり、黒褐色の太い過眼線がある。成鳥は上面がほぼ一様に黒褐色で、下面は白色。海岸付近や内陸の河川、湖沼に生息し、魚類を捕食する。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では留鳥。南西諸島では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

通年生息し、人が近づかないような海岸の切り立った岩場や大木の上に営巣する。ほとんどの島では、繁殖期より冬の方が個体数が多い。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

かつては比較的大きい島では繁殖していたが、近年減少しているようである。原因のひとつとして、釣り人が営巣場所に小船などで立入り、繁殖に悪影響を与えることが挙げられる。また、営巣に適した大木が減ったとも減少の原因であるので、営巣できるような大木の保護や管理をすることが望ましい。

【関連文献】

長谷川雅美ら, 1996; 小倉暁雄, 2000.

(執筆: 川内博・金井裕)



サシバ

*Butastur indicus*タカ目
タカ科

伊豆諸島

CR

環境省

VU

【形態・生態】

全長 49cm。雄成鳥の頭部は灰褐色で、体上面、胸は茶褐色。喉は白く、中央に 1 本縦斑がある。体下面は白く、茶褐色の横斑がある。主に低山地の樹林で繁殖し、カエルやヘビ、バツタ類などを捕食する。

【分布の概要】

本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥または旅鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

夏鳥として少数渡来し、樹林と開けた草地がセットになった環境に生息する。近年はどの島でも渡来数が激減しており、三宅島では 1982 年ごろのニホンイタチの導入以降、繁殖個体が見られなくなった。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本種の繁殖には食物である爬虫類の生息や営巣木となるアカマツなどの大木が必要である。また、オカダトカゲなどを捕食するニホンイタチと餌資源をめぐり競合するため、ニホンイタチの個体数管理を行うことが望ましい。

【関連文献】

長谷川雅美ら, 1996.

(執筆: 川内博・金井裕)



ノスリ

Buteo buteo japonicus

タカ目
タカ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 54cm。体下面は淡いバフ色で翼先、翼角に暗褐色の斑がある。尾は短く円尾で下面に細い横帯がある。山地の樹林で繁殖し、冬は広大な干拓地、河川敷、農耕地などで越冬する。主にネズミ類などの小動物を捕食する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国では留鳥または漂鳥。九州では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

三宅島などではかつては留鳥として生息していたが、現在は冬鳥として少数渡来する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大型の猛禽類で、その生存を脅かす動物は少ないと思われる。しかし、餌動物が少ないため、越冬地の環境を保全し、より豊かな生物相になるようにするような工夫が必要である。

【関連文献】

小林豊・山本裕, 1994.



(執筆: 川内博・金井裕)

オオコノハズク

Otus lempiji semitorques

フクロウ目
フクロウ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 23.5 ~ 26.0cm。成鳥は全体に黒褐色で、灰黒色、灰白色、バフ色の複雑な虫食い斑がある。平地から山地の樹林に生息し、昆虫類やネズミ類、小鳥、トカゲ類、カエル類などを捕食する。

【分布の概要】

北海道、本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として、樹林や林縁などに少数が生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の環境保全が最も重要である。防鳥ネットにかかり保護される例が多いので、その対策と工夫が必要である。

【関連文献】

小倉暁雄, 2000.



(執筆: 川内博・金井裕)

アオバズク

Ninox scutulata japonica

フクロウ目
フクロウ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 27.0 ~ 30.5cm。成鳥は頭部から尾にかけての上面が黒褐色で、体下面は白地に黒褐色の縦斑がある。平地から山地の樹林、大径木のある社寺林などに生息し、主に昆虫を捕食する。樹洞で営巣する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では留鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島では留鳥として生息する。日中は樹林内や林縁の枝で休息し、日没ごろから活発に採食活動始める。

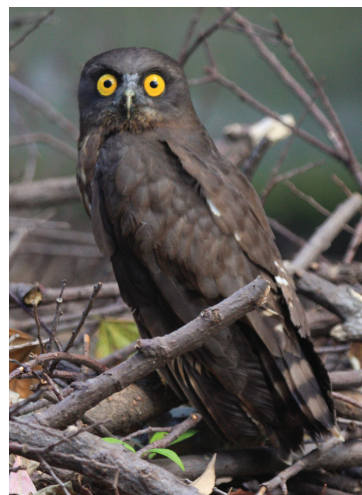
【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

三宅島では 2000 年の噴火により、営巣木や樹洞が焼失し、生息数が減ったことがわかっている。現在の樹林の保全とともに、営巣できるような大木の保護や管理をすることが望ましい。

【関連文献】

三宅島自然ふれあい友の会, 1997; 三宅島自然ふれあい友の会, 2007.

(執筆: 川内博・金井裕)



トラフズク

Asio otus otus

フクロウ目
フクロウ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 35 ～ 40cm。羽角が長い。翼は長く、飛翔時の翼上面は初列風切基部の淡い橙褐色が目立つ。平地から山地の樹林、河畔林、耕作地、草地などに生息し、ネズミ類や小鳥などを捕食する。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州（中部以北）では留鳥。本州（中部以南）、四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

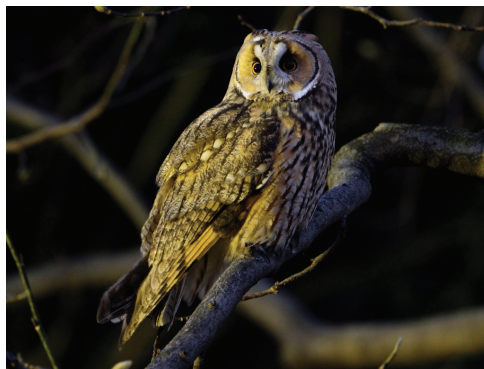
冬鳥として稀に渡来し、樹林をねぐらとして越冬する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ねぐらとなっている樹林と餌場の保全が重要で、その場所が発見された場合、立入りを制限するなどの対策を講じることが望ましい。

【関連文献】

小林豊・山本裕，1994.



(執筆：川内博・金井裕)

ミヤケコゲラ

Dendrocopos kizuki matsudairai

キツツキ目
キツツキ科

伊豆諸島

VU

環境省

【形態・生態】

全長 15cm。頭から体の上面は黒褐色で背と翼には白色の横斑がある。体の下面は汚白色で、目から頬にかけてと顎線は黒褐色、胸側から脇には褐色の斑紋がある。ギーツ、ギーツ。ギーツキツキツキツと鳴く。樹木にいる昆虫類やクモ類などを採食するほか、木の実を採食することもある。冬季にはシジュウカラやメジロと混群をつくり行動をすることがある。

【分布の概要】

伊豆諸島の一部と屋久島に分布する。

【伊豆諸島における生息環境】

樹林から住宅街の庭木などで普通に見られるが、数はあまり多くない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林性の鳥のため、火山活動による樹林の減少や、餌場や営巣環境の消失の影響を受けやすい。現状の樹林を保全することが望ましい。

【関連文献】

加藤和弘・樋口広芳，2003.



(執筆：川内博)

ハヤブサ

Falco peregrinus japonensis

ハヤブサ目
ハヤブサ科

伊豆諸島

EN

環境省

VU

【形態・生態】

全長雄 42cm、雌 49cm。成鳥は上面が青黒色で、眼から頬にはひげ状の黒斑がある。平地から山地の海岸、河口、河川、湖沼、農耕地などに生息し、一般に崖地の岩棚や横穴で繁殖する。主に飛んでいる鳥類を捕食する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

人が近づけないような岸壁などで営巣する。少数は通年生息し、繁殖していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

島という小面積の中で、餌資源が限られている。営巣場所の確保と現状の生息環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

長谷川雅美ら，1996；小倉暁雄，2000.



(執筆：川内博・金井裕)

ナミエヤマガラ

Poecile varius namiyei

スズメ目
シジュウカラ科

伊豆諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

全長 14cm。頭部は黒とバフ色、背と腹は茶褐色、肩羽と翼は暗青灰色。亜種ヤマガラと亜種オーストンヤマガラとの中間的な形質を示し、羽色の変異が大きい。地鳴きはツイッ、ツイッ、または、ニーニーという鼻声で鳴く。ツーツービー、ツーツービーとゆっくりとくり返してさえずる。ただし、亜種間でかなり鳴き声は異なる。硬い木の実を両足ではさみ、嘴で割って採食する。また、木の実を樹皮のすきまに貯える。

【分布の概要】

伊豆諸島（新島、神津島）に分布する。利島は絶滅。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として新島と神津島で生息が確認されている。主にスタジイやタブノキなどの生い茂る照葉樹林で見られる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本亜種は、個体数が 1800 羽程度と個体群として小規模であると推測されている。また、オーストンヤマガラの侵入などもあり、その存続が心配されている。現状の環境の保全とともに、自然林の伐採などに留意することが望ましい。

【関連文献】

上田恵から, 2004; 高橋雄史, 2005.

(執筆: 川内博)



鳥類

伊豆諸島

オーストンヤマガラ

Poecile varius owstoni

スズメ目
シジュウカラ科

伊豆諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

全長 14cm。形態・生態は、ナミエヤマガラとほぼ同様である。亜種ヤマガラより体が大きく、赤味が強い。伊豆諸島南部の亜種オーストンヤマガラは額や頬も赤褐色である。昆虫類やクモ類などのほか、木の実などもよく採食する。

【分布の概要】

伊豆諸島に分布する。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として伊豆諸島の南部、三宅島、御蔵島、八丈島に生息する。主によく発達した照葉樹林に生息する。

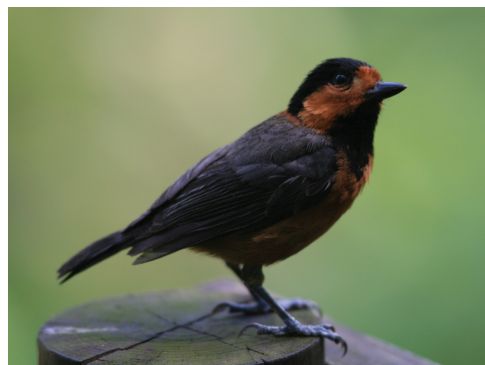
【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本亜種は個体数が 5000 羽程度と推測され、三宅島の 2000 年の噴火前と比べると 36% 減少と推測されている。噴火などの自然災害が多い伊豆諸島では、自然林の確保が重要で、伐採などの開発については十分な注意が必要である。

【関連文献】

藤田薫ら, 2005; 藤田薫ら, 2011.

(執筆: 川内博)



イイジマムシクイ

Phylloscopus ijimae

スズメ目
ムシクイ科

伊豆諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

全長 11.5cm。センダイムシクイに似ているが頭中央線はなく、下尾筒の黄色みが弱い。チュルチュルチュルなどとさえずるがバリエーションが多い。地鳴きは鋭くヒーと鳴く。

【分布の概要】

夏鳥として伊豆諸島とトカラ列島で繁殖する。伊豆諸島や琉球列島では少数が越冬することがある。春と秋の渡りの時期には本州、屋久島、琉球諸島での記録がある。本種の越冬地はまだ不明だが、冬にフィリピンのルソン島で採集記録がある。

【伊豆諸島における生息環境】

夏鳥として渡来し、照葉樹林から二次林までの様々な環境に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境は広いが、分断されていない連続した樹林を必要とするので、照葉樹林を主体とした環境の保全がもっとも大事である。

【関連文献】

Takagi, M. & H. Higuchi, 2000; 渡部良樹, 2011.

(執筆: 川内博)



ウチャマセンニュー

*Locustella pleskei*スズメ目
センニュー科

伊豆諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

全長 17cm。体はオリーブ褐色で下面が淡く、淡色の眉斑があり、尾は円尾で先端は灰白色。枯れ茎にとまってチュルルチュカチュカとさえずり、短いさえずり飛翔もする。比較的高い声で、濁りが少ない。島しよ性で海岸に近いササ藪や草地、照葉樹林などに生息する。

【分布の概要】

夏鳥として伊豆諸島の一部、本州、四国、九州の一部の島しよに渡来し、繁殖する。秋の渡りの時期には本州の一部、南西諸島などで記録がある。

【伊豆諸島における生息環境】

夏鳥として渡来し、ササ類やハチジョウススキなどが広がる疎林や草原に生息する。近年、個体数の減少が著しい。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

疎林や草原が減少していることが、生息数の減少の原因となっている。ササ類やハチジョウススキなどが主体の草原の復活が望まれる。また、三宅島では 2000 年噴火の影響が大きく影響していると思われる。

【関連文献】

藤田薫ら, 2005; 江崎逸郎, 2009.

(執筆者: 川内博)



モスケミソサザイ

*Troglodytes troglodytes mosukei*スズメ目
ミソサザイ科

伊豆諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

全長 10.5cm。日本で最も小さな鳥の一つ。体は丸くて嘴は細く、短い尾を上げている。体は褐色で黒い横斑や灰白色の斑点がある。眉斑は不明瞭。地鳴きはウグイスに似てチャッ、チャッと鳴く。さえずりは複雑で長く、体の割に大きい。良く発達した照葉樹の自然林に多く、林床や低木層を活発に移動しながら、昆虫やクモなどを採食する。

【分布の概要】

伊豆諸島の照葉樹林、林縁に生息する。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として照葉樹林に生息し、コケの多い谷筋や崖地などを好む。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

比較的環境選択性が狭く、好適な環境でないと生息できない傾向があるので、現状の樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

加藤和弘・樋口広芳, 2003.

(執筆者: 川内博)



トラツグミ

*Zoothera dauma aurea*スズメ目
ヒタキ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 29.5cm。頭部から腰までの背面と翼は黄褐色で黒い小斑が密にある。低山地から亜高山帯までの樹林に生息し、冬は山麓地域に下る。昆虫類やミミズ類、植物の果実などを採食する。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として、照葉樹林やスギ、ヒノキなどが混じった樹林に生息する。林床を主な採食場所とする。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

薄暗い林床を好むので、現状の樹林環境を保全することが望まれる。

【関連文献】

高木真一ら, 1986.

(執筆者: 川内博・金井裕)



アカコッコ

*Turdus celaenops*スズメ目
ヒタキ科

伊豆諸島

EN

環境省

EN

【形態・生態】

全長 23cm。雄の頭部は黒くて胸の赤褐色との境は明瞭。背はアカハラより赤味が強く、尾は黒味が強い。下面の赤褐色も濃い。雌の背や下面もアカハラより赤味が強く、喉には黒色の斑紋があるが、頭部がかなり黒いものもある。濁った声で短くギョロロツ、ジッなどとさえずる。ミミズやムカデ、昆虫類を採食するほか、木の実もよく採食する。

【分布の概要】

留鳥として伊豆諸島と南西諸島のみで繁殖する。一部は漂鳥として冬に伊豆半島や本州（相模湾岸）などに渡来し、越冬する。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として平地から山地の樹林や農耕地、林縁などに生息する。低木林の中に畑地が点在するような環境をもっとも好む。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ネズミによる農業被害対策のため、人為的に放たれたニホンイタチにより、特に巣やヒナが襲われ個体数が減少している。また火山活動により、樹林が破壊され影響を受けている。

【関連文献】

高木昌興・樋口広芳, 1992; 江崎逸郎ら, 2009.

(執筆: 川内博)



タネコマドリ

*Luscinia akahige tanensis*スズメ目
ヒタキ科

伊豆諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

全長 14cm。雄では頭部から上胸は橙赤褐色、背と翼は暗橙褐色で、尾は橙赤褐色。胸側から腹は灰褐色。胸に黒帯はない。雌は全体に色が淡い。地鳴きはツンツンツンという細い声で、ヒンカラララと朗らかな大きな声でさえずる。

【分布の概要】

留鳥として伊豆諸島と屋久島などに生息し、平地から山地で繁殖する。

【伊豆諸島における生息環境】

留鳥として、よく発達した照葉樹林に生息する。そのような場所があれば海岸付近から山頂まで見られる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

照葉樹主体の自然林に多い。樹林伐採が広がらないよう、現状の樹林環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

加藤和弘・樋口広芳, 2003.

(執筆: 川内博)



オオルリ

*Cyanoptila cyanomelana cyanomelana*スズメ目
ヒタキ科

伊豆諸島

*

環境省

【形態・生態】

全長 16.5cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面が青色で、顔から喉、胸、脇にかけては黒い。体下面は白色。低山地から山地にかけての林に生息し、溪谷に沿った樹林を好む。昆虫類などを採食する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

もともと本種は、伊豆諸島では春季と秋季に通過する旅鳥であるが、大島では1970～1973年に、神津島では1971年、1972年に囀るオスが観察されている。2010年5月の神津島での調査においても、この鳥の好適環境と思われる場所で、複数の雄個体のさえずりを確認した。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

2010年に観察された場所は、神津島の奥地で、近くはごみの処分場になっている。本種の生息には特に影響はないと思われるが、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

小林豊・山本裕, 1994; 小倉暁雄, 2000.

(執筆: 川内博・金井裕)



ハギマシコ

*Leucosticte arctoa brunneonucha*スズメ目
アトリ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 16cm。雄成鳥の冬羽は前頭と顔から喉までが黒く、翼は黒褐色。腰は黒褐色で、赤紫色の斑がある。海岸から山地の岩場、草地、耕作地、砂浜などに生息し、植物の種子などを採食する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

冬鳥として少数が渡来する。群れをなして、岩場の多い山肌などで越冬する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

個体数が少なく、確実な越冬地は少ないので、現状の環境を保全することが望ましい。

【関連文献】

望月英夫, 2009.



(執筆者: 川内博・金井裕)

クロジ

*Emberiza variabilis*スズメ目
ホオジロ科

伊豆諸島

NT

環境省

【形態・生態】

全長 17cm。雄成鳥の夏羽は全体が灰黒色で、体下面はやや淡色。繁殖期は山地のササが茂る樹林、冬は平地から低山地の暗い樹林に生息し、植物の種子や昆虫類などを採食する。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【伊豆諸島における生息環境】

冬鳥として、よく発達した照葉樹林に渡来する。薄暗い林床で採食するが、林縁に出てくることがある。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伊豆諸島は、主に日本で繁殖する本種の重要な越冬地となっていると思われるので、その生息環境の保全は重要である。

【関連文献】

東京都利島村(編), 1998.



(執筆者: 川内博・金井裕)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、次の文献に準拠した。

日本鳥類目録編集委員会 (編), 2012. 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会.

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
オオルリ	これまで伊豆諸島ではオオルリの繁殖記録はなかったが、近年の調査で神津島において繁殖していることが明らかとなったことから、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

- Carter, H. R. *et al.*, 2002. Status and conservation of the Japanese murrelet (*Synthliboramphus wumizusume*) in the Izu Islands, Japan. 山階鳥類研究所研究報告, 33 (2): 61-87.
- 江田真毅・樋口広芳, 2012. 危急種アホウドリ *Phoebastria albatrus* は 2 種からなる!? 日本鳥学会誌, 61(2): 263-272.
- 江崎逸郎, 2009. 三宅島におけるウチヤマセンニュウの生息状況について. *Miyakensis*, 12: 81-86.
- 江崎逸郎・篠木秀紀・山本裕, 2009. 三宅島にアカコッコは何羽いるのか? ～三宅島全域における個体数のモニタリング方法の検討～. *Miyakensis*, 12: 77-80.
- 藤巻裕蔵 (編著), 2006. 日本のオシドリ ―形態・分布・生態―. 日本オシドリの会. 89 pp.
- 藤田薫・藤田剛・富岡辰先・山本裕・樋口広芳, 2005. 希少鳥類オーストンヤマガラとウチヤマセンニュウの 2003 年三宅島噴火前後の個体数変化. *Strix*, 23: 105-114.
- 藤田薫・藤田剛・長谷川雅美・樋口広芳, 2011. 伊豆諸島に生息するヤマガラ 3 亜種の個体数と生息の安定性. *Bird Research*, 7: 13-31.
- 原徹, 2000. オーストンウミツバメの島. *Birder*, 14(8): 20-25.
- Harrison, P., 1983. Seabirds: An identification guide. Houghton Mifflin. 448 pp.
- 長谷川博, 1987. 島じまでヒナを育てる海鳥たち. 野鳥, (494): 14-18.
- 長谷川博, 2003. 50 羽から 5000 羽へ ～アホウドリの完全復活をめざして. どうぶつ社. 222pp.
- 長谷川雅美・浅田正彦・黒住耐二・関啓一・黒野博之・矢野聡美・谷口薫美, 1996. 伊豆諸島、新島及び神津島における食物連鎖構造の解明と移入動物の影響. 第 5 期 PRO NATURA FUND 助成成果報告書: 45-55.
- 蓮尾純子, 1996. アカエリヒレアシシギ. 日本動物大百科 3 鳥類 I, pp. 106-107. 平凡社.
- 樋口広芳, 1973. 伊豆諸島の鳥類 (I) 繁殖陸鳥の分布と生息環境. 鳥, 22: 14-24.
- Higuchi, H., 1986. Bait-fishing by the Green-backed Heron *Ardeola striata* in Japan. *Ibis*, 128: 285-290.
- 岩崎由美・市石博, 1998. 伊豆大島・利島におけるカラスバトのねぐら. *Strix*, 16: 89-98.
- 加藤和弘・樋口広芳, 2003. 三宅島 2000 年噴火後の森林における鳥類群集. *Strix*, 21: 81-98.
- 川上和人, 2010. ミゾゴイ. 野生生物保護学会 (編). 野生動物保護の事典, pp. 511-513. 朝倉書店.
- 北九州野鳥の会研究部, 1967. 筑前沖の島付属島小屋島のカンムリウミスズメ・ヒメクロウミツバメ繁殖地における人為的被害に関する実態調査 その 2 ヒメクロウミツバメ. 北九州野鳥の会研究部. 23 pp.
- 小林豊・山本裕, 1994. 三宅島で 1993 年 4 月より 1994 年 3 月にかけて確認された野鳥 120 種について. *Miyakensis*, 1: 52-56.
- 三宅島自然ふれあい友の会, 1997. 三宅島一周道路周辺のアオバズクの個体数. *Miyakensis*, 4: 48-50.
- 三宅島自然ふれあい友の会, 2007. 2000 年、2005 年、2006 年、三宅島一周道路周辺のアオバズクの個体数. *Miyakensis*, 10: 69-72.
- 望月英夫, 1973. 蘭難波島のカツオドリの現状. 鳥, 22: 71-72.
- 望月英夫, 2009. 大島の鳥類データ. 東京都産鳥類目録 2000・作成データ集.
- 中村登流・中村雅彦, 1995. 原色日本野鳥生態図鑑 < 水鳥編 >. 保育社. 304 pp.
- 中野晃生, 2006. 伊豆諸島大島に生息するカラスバトの繁殖期の決定要因とテリトリー防衛行動. *Strix*, 24: 39-47.
- 小倉暁雄, 2000. 新島・式根島で出会った鳥たち. 平成 10 年度新島村博物館年報: 79-103.
- 小野宏治, 2010. カンムリウミスズメ. 野生生物保護学会 (編). 野生動物保護の事典, pp. 490-493. 朝倉書店.
- 柴田敏隆, 1980. ウミウと私. 海洋と生物, 2(4): 283-285.
- 高木昌興・樋口広芳, 1992. 伊豆諸島三宅島におけるアカコッコ *Turdus celanops* の環境選好とイタチ放獣の影響. *Strix*, 11: 47-57.
- Takagi, M. & H. Higuchi, 2000. Habitat Selection by Ijima's Willow Warbler *Phylloscopus ijimae* on Miyake-jima, Japan. *Japanese Journal of Ornithology*, 49:113-117.
- 高木真一・伊藤正道・高木由美子・伊藤薫, 1986. 八丈島の鳥類 2 年間の記録 (1984 年 4 月～1986 年 3 月). *Strix*, 5: 74-79.
- 高橋雄史, 2005. 神津島に生息するナミエヤマガラの個体数推測. 日本鳥学会 2005 年度講演要旨集, 125 p.
- 東京都利島村 (編), 1998. 伊豆諸島 利島の鳥 利島の植物. 東京都利島村役場. 123 pp.
- 上田恵介・山口典之・森本元・福永杏, 2004. 希少鳥類ナミエヤマガラの基礎生態研究一少ない生息数が引き起こす独特な生活史形質. 第 15 期 PRO NATURA FUND 助成成果報告書, pp. 1-11.
- 渡部良樹, 2011. イイジマムシクイの渡りの謎に迫る. *Birder*, 25(3): 41.
- 綿貫豊, 1985. 大黒島におけるコシジロウミツバメ *Oceanodroma leucorhoa* の繁殖生態. 山階鳥類研究所研究報告, 17: 9-22.